日本気象学会
1882 創立

天　　気

1984年1月
Vol. 31, No. 1

巻頭言

理事長　岸　保　勘三郎

第22期の理事会は本年7月の理事改選により，あと6ケ月後には次期理事会にバトンタッチをすることになりました．率直にいって今期の理事会は100周年記念事業の実施とその後始末に明け暮れしたと思います．しかし曲がりなりにも今日まで学会の運営ができましたことは，会員の皆様の御支援と御協力の賜物だと深く感謝する次第です．

学会は一昨年の100周年記念事業を実施し，現在，21世紀に向けて新しい時代を迎えようとしています．長期計画委員会では，1960年代，1970年代と，その時代時代に応じて学会の長期計画の立案，見直しをしてきました．1970年代の長期計画案の要旨は1983年の「天気」10月号に掲載されていますが，残念ながら紙数の関係上，その“まとめ”しか掲載されていません．ここでは「天気」に掲載されなかった原案の一部を引用しながら，学会の会員数の動向に関連したことを少し述べてみたいと思います．

1972年の長期計画委員会の案によれば，1970年には約2,400名であった国内個人会員数を1980年には，4,000名にすることを目標としています．そのためには1980年頃までに気象庁関係者300名，気象学講座のある大学関係者100名，気象に関連した他官庁研究所，民間企業の研究者700名，一般会員450名位の会員数増加を期待しています．これに対し現在の国内個人会員数は目標の4,000名には達していませんが約3,700名（但し，団体会員，外国人会員を含めると4,400名）となり，また現在までの会員数増加の内訳は1972年の長期計画委員会の期待したような数字で増加しています．

ここで強調したいことはここ10年間に，気象に関連した官庁研究所，民間企業の研究者や一般会員に大幅な会員数の増加があったことです．このことは，気象学会の会員層がいろいろな分野に拡がりつつあることを示しています．

このような過去10年間の会員増，会員の層の多様化を考えますと，今後の学会運営には今迄通りの気象学会としてではなく，いろいろな階層の集合体として，少しづつ新しく運営を考え直していく必要があります．そのためには今後地域研究に密着した学会の支部活動の一層の強化，学会機関紙「天気」の内容を一段と興味あるものにしていくこと，が大切になってくると思います．「天気」は1982年の100周年記念特集は別として，現在財政上の制約で頁数の制限があり，掲載記事も会員の要望を充分に満たしていない現状だと思います．しかし今後財政面で可能な限り頁数をふやし，また内容も面白く，気軽に読めるようなものにしていく必要があると思います．理想をいえば，「天気」を読んでいれば細かい事を知らなくても，気象界の動向の大筋はつかめるといった時代にしたいと思います．「天気」の編集部では，例えば新聞，週刊誌等で読物風な記事としてよくとりあげられている“エル・ニーニョ”，“エルチチョン火山爆発”，“酸性雨”といった解説記事などを学会機関紙という別の立場からとりあげてみたいという抱負も持っています．これは一つの例ですが，その他の解説についても編集部では一般会員のためにいろいろと多面的な編集を考えています．しかしそのアイデアを生かすためには「天気」増頁の財政的裏付け，解説のうまい執筆者を探し出すといった問題が残されています．学問的には正しく，内容的にも面白いといった解説を書いて下さる執筆者を

探し出すという事は言うは易く，実行は大変困難さを伴うことなのです．

次に「気象集誌」のこともひとこと触れておきたいと思います．「気象集誌」は「天気」とちがい，外向きの学会のひとつのシンボルであり，世界の気象関係者との交流という面も持っています．最近「気象集誌」は投稿論文数も増え，1981年からは年間900頁の印刷物になりました．1970年代は投稿論文も少なく，年間600頁の線を維持するのがやっとでした．しかしここ3年間，外国の会員からの投稿がふえたこともありますが年間900頁の線を維持しています．英国の学会機関紙 Quarterly Journal of Royal Meteorological Society が年間約1,000頁である事を考えますと，印刷頁数は大体英国気象学会の機関紙と同じ位になったと思います．頁数のみで研究の質を論じる事はできませんが，今後とも是非この位の論文発表数は確保し，同時に質の向上にも努力したいと思います．

以上いろいろと決意じみた事を書きましたが，学会運営について今後とも会員の皆様の御協力を切に期待いたします．

日本気象学会および関連学会行事予定

行　事　名	開催年月日	主催団体等	場　所
月例会「長期予報・大気大循環」	昭和59年2月23日		気象庁内
日本気象学会昭和59年春季大会	昭和59年5月23日～25日	日本気象学会	気象庁
第20回理工学における同位元素研究発表会	昭和59年7月2日～4日		国立教育会館
第10回国際生気象学会議	昭和59年7月26日～30日		順天堂大学 有山記念館・医学部
Twelfth International Laser Radar Conference	1984年8月13日～17日	Int. Radiation Commission (IRC) Committee on Laser Atmospheric Sensing (CLAS)	Aix-en-Provence, France

日本気象学会誌 **気象集誌**

第II輯　第61巻　第5号　1983年10月

目　次

川平浩二：中層大気における定常惑星波の全球構造

P.S. Chu・D.N. Sikdar：1978年12月 WMONEX 期における地上気圧と地上気温の変動の特徴

岡田菊夫：都市大気中に浮遊する個々の吸湿性粒子の性質について

岡田菊夫・小林愛樹智・久芳奈遠美・岩坂泰信・武田喬男：都市大気中のエイトケン粒子の個数粒径分布について—サルフェイト粒子に注目して—

岩井邦中：板状の雪の結晶の三次元的な構造

近藤　豊・岩田　晃・高木増美：航空機観測用ケミルミネッセンス方式 NOx 測定器

要報と質疑

田中　浩：粘性をもつ中層大気中での慣性重力波及び内部重力波の運動量発散について